

高麗時代の仏教に対する研究

佐藤 厚・金 天鶴

1. 緒言
2. 通史と国際交流
3. 仏教儀礼と寺院経済
4. 大蔵経と『義天録』
5. 『三国遺事』と『海東高僧伝』
6. 天台宗と浄土及び図讖信仰
7. 結語

1. 緒言

本稿では、日本における高麗時代の仏教に関する研究として、①通史と国際交流、②仏教儀礼と寺院経済、③大蔵経と義天の教蔵、④『三国遺事』と『海東高僧伝』⑤天台宗と浄土思想及び図讖信仰の5項に分けて研究動向をまとめる。なお、高麗時代の華嚴教学および禅宗については、本誌の他の章に譲る。

さて、本稿で扱う5つの項目の中、最も研究が盛んに行われた分野は③大蔵経と義天の教蔵である。そして、これが①で触れられる国際交流にも繋がっている。こうした研究は、1900年の早い時期からなされ、研究が蓄積されていくが、日本の敗戦を境に研究の数が減少する。それがやがて韓国からの留学生の増加に伴い、少しずつ回復するようになる。

2. 通史と国際交流

(1) 通史

高麗仏教を通史の立場から最初にまとめたのは、青柳南冥 [1911] 『朝鮮宗教史』の中の仏教編と考えられる。ここでは、高麗の仏教を様々な講会を中心として捉え、やがて仏教が墮落したため儒教に排仏されることを述べている。こうした捉え方は吉川文太郎 [1921] でも同じである。一方、青柳南冥編 [1924] 『朝鮮文化史大全』では、時期別に7人の僧侶を選びその伝記を紹介している。ただ、これらの研究は、その書名からもわかるように、高麗仏教を韓国の宗教史の枠組みで論じており、仏教研究という枠組みのそれではない。

仏教研究の中で、高麗仏教を本格的に扱った研究は高橋亨 [1929a] 『李朝仏教』である。本書では、高麗を象徴する仏教のはじまりは義天であり、かつこの時期が新羅仏教から高麗仏教への本質的な転換期であるとし、それは知訥まで繋がるという。また、高麗は始終一貫して信仰を弛めない強固な仏教国であったが、僧徒が古代の祭政一致時代のように政治に関与した結果、却って高麗滅亡のきっかけとなったと評価する。

続いて日本人の手になる韓国仏教全体を貫く最初の著述である忽滑谷快天 [1930] 『朝鮮禅教史』では、韓国仏教史全体の中では高麗時代を禅教並立の時代に分類し、禅と教がともに隆盛した時代と評価する。この見解はほぼ現在にまで至っている。また、江田俊雄 [1958] 「朝鮮の仏教」、大類純 [1971] 「朝鮮仏教考察序説」では、高麗時代を爛熟期、或は発展期の仏教に分類し、高麗仏教の調和性や信仰性を強調している。通史としては最新の鎌田茂雄 [1987] 『朝鮮仏教史』でもこうした視点は同様である。

さて、一口に高麗時代と言っても450年の長きに亘るわけであるが、時期区分については二宮啓任 [1969] が行っている。そこでは高麗の仏教を、創業期、盛期、中期、武人政権の時代、江華逃入時代、衰亡期との六つの時代に分類する。

続いて、高麗仏教の宗派の盛衰に関連する論文は、高橋亨 [1914a] 「朝鮮仏教宗派通減史論」が最初である。ここでは高麗の宗について、僧科を

設けて以来重大な変化があり、それは単なる教義の上の問題ではなく国家認容の事実に基づいているとし、その結果として、華嚴、法相、禪、律、涅槃、三論、法華との七宗を挙げる。金炳奎 [1941] はこの七宗に三宗を追加してはいるものの、基本的に五教兩宗を中心とした枠組みで高麗中期以降の宗派を理解している。これに対し、韓基斗 [1981] はこの五教兩宗が実際に存在した宗派を指すのではなく、当時の全仏教・全仏教の僧侶の総称と見ている。

(2) 国際交流

① 高麗と宋の関係

高麗時代の仏教思想は、その国際交流が活発な時代でもあった。中でも高麗と宋の関係は東アジアの文化交流にも大きな影響を与える。韓泰植 [1983] は高麗初期の法眼宗と高麗仏教関係に注目する。章輝玉 [1997] は、10・11世紀の韓・中仏教の交流関係を、韓国の天台宗と華嚴宗が中国のそれぞれの思想に大きく影響したとしながら、義天と宋代華嚴との関わりを述べる。さらに、義天と宋代仏教の交渉に関しては大屋徳城 [1937b] が、宋代仏教からの観点では吉田剛 [1999] が参考になる。吉田は、義天が宋代の華嚴教学が盛行する基盤となったと述べている。さらに、竺沙雅章の竺沙 [1982]、竺沙 [1988] も宋・麗交渉史を述べる中で、義天の寄進によって造営された慧因教寺（高麗慧因教寺とも呼ばれた）について述べながら、10・11世紀に高麗・宋・遼・日本の四国の間に仏典の往来が盛んに行われ、中でも高麗と宋との関係が重要であり、そこから高麗仏教は東アジア間の仏教をつなぐ要の位置にあると評価する。

② 高麗と遼との関係

続いて大蔵経の流通との関連で遼との関係に触れておく。なお、大蔵経そのものについては後に触れる。

神尾式春 [1937] 『契丹仏教文化史考』では第6章に当たる「契丹仏教文献の東流」の中で、「義天録と丹本章疏」「丹蔵の麗蔵に与えた影響につ

いて」という項目を設け、遼と高麗との関係に触れている。これによると、遼代仏教の研究における義天の経録、いわゆる『義天録』の重要性が述べられる。また、守其の『大蔵校正別録』によって遼の大蔵経の特性が知られるという指摘も重要である。また、後に高麗の僧宓菴（円鑑国師）により、丹蔵が讚歎され松広寺に修補されたとする¹。

③ 高麗と日本との関係

続いて高麗と日本との関係である。大屋徳城 [1939b] では、平安末葉に義天の続蔵が日本に伝来し当時の仏教に影響を与えたとする。そこでは、義天のいわゆる『義天録』と『円宗文類』が日本で流通したほか、義天が刊行した続蔵経が日本へ輸入されたことを述べる。義天の印行した典籍がいつどのようなルートを通して日本へ輸入して来たのかについては、詳細は不明であるが、一つには高麗から直接日本へ将来されたもの、二つには高麗から宋へ行き、宋で復刊されたものが日本に将来されたもの、という二つの可能性があるという。また、鎌倉時代には知訥の『華嚴論節要』は直接日本へ輸入されたものであるが、義天ほどの影響力はなかったことを指摘している。

鎌倉時代の仏教との関連では、柴崎照和 [1996] では明恵の著述の中の新羅・高麗の文献を調査し、その関係の深さと特性について述べている。

④ 高麗と元との関係

このほか、全宗釈 [1987] は高麗仏教と元代の喇嘛教との関係を述べながら、元の内政干渉により高麗が受けた喇嘛教の影響を四つの面から説明し、高麗社会に広がった密教思想を読みとっている。

ほかに、湯山明 [1985] は演福寺銅鐘の梵語銘文覚書を研究し、それが仏教文献学とともに密教文献学や中印音韻史研究に極めて貴重な資料となると評価する。

このように高麗と宋、高麗と契丹、高麗と日本などの関係から、当時の

¹ 円鑑国師については、すでに高橋亨 [1924] により注目されている。

東アジア全体が交流の時代であり、その中で高麗は仏教を通して周辺の国々との交流が密であったことがわかる。

3. 仏教儀礼と寺院経済

(1) 仏教儀礼

高麗時代は八関会、燃灯会、仁王会といった国家が行う仏教儀礼が盛行した時代であった。これらは単なる仏教に基づく儀礼というよりは、土俗的な信仰や現世利益の観念などが交じり合った複合的な信仰形態であるところに特徴がある。こうした見解は、早くは三品彰英 [1954] 「朝鮮における仏教と民族信仰」から見られる。

この方面の研究は、二宮啓任により数多くなされている。二宮 [1956] は、『高麗史』などの史書から八関会に関する記述を整理して提示し、八関会がその名称から推測されるイメージとは異なり仏教的要素は低く、民族的な年中行事の一つである「俗節」であることを述べる。続く二宮 [1958] では燃灯会と八関会とを比較し、さらに二宮 [1959] では、新羅から継承された高麗の仁王会は鎮護国家の祈祷であり、他の儀礼に比して国家的法儀として認められていたこと、またその際には飯僧が一緒に行われたことを特徴とするという。続く二宮 [1961] では、高麗の様々な齋会の類型や目的を分類し齋が行われる場所を提示する。まず、三つの類型に分類する。一つは、他の法会に付随して修められたものと、二には、齋そのものを主な目的とし内容として設けた場合、三には、僧俗を分たず広く一般を対象として食事を施すものである。これらはいずれも王室が関連された国家的性格であることを表すとする。

これ以後、儀礼に関するまとまった研究としては、洪潤植 [1976] 『韓国仏教儀礼の研究』がある。本書では、高麗の仏教儀礼を、①經典信仰儀礼、②神衆信仰儀礼、③伝承習俗による儀礼、④齋会、⑤密教的信仰儀礼、の5種類に分類し、最後に高麗仏教儀礼の構造と特徴を整理する。構造については、法会の所依經典と信仰の対象、信仰の目的から分類し、その結果、

高麗時代の仏教儀礼の中、土俗信仰儀礼の仏教儀礼化を指摘している。さらに仏教儀礼の特徴としては、高麗国論の統一という目的が強かったと述べる。この研究は融合・統一に結論を合わせる傾向がある²。また、梁銀容 [1979] は高麗八関会が固有の仙風を強調していることから、それが非仏教的というよりは仙仏融合性格であると述べる。

里道德雄 [1981a] 「朝鮮仏教における八関齋会」は、それまでの八関齋に関する議論を整理し、インド・中国のそれとは異なる面を浮き彫りにした後、それを単なる民族的な信仰形態に解消するのではなく、『薬師経』の経説に基づく仏教のそれとして理解する。さらに里道 [1983] では高麗時代の八関会に関する記録を整理し、①形式と内容、②日時、③場所、④設営及び役位、⑤大会諸事の5項目に分けて論じている。総じては八関会が具体的に行われていた状況の復元を試みており非常に有益である。

(2) 寺院経済

高麗時代の寺院の経済関係を対象にした研究には、古くは旗田魏 [1932] 「高麗朝における寺院経済」がある。ここでは高麗仏教について仏教教理の発展はなく、むしろ祈祷仏教であると断定する。これに「国家裨補」の観念が結合して、王室と寺院、貴族と寺院の総合関係が成立し、高麗の最盛期の文宗の頃には、農民の苦悩を犠牲して、各地で多数の寺塔が建立されたと述べる。こうした関係を基盤にした高麗寺院の経済について、寺領と寺院の商業行為等を中心として述べている。

以後、寺院の経済について論究したものは見当たらないが、金鐘国 [1980] は高麗武臣政権と僧徒の対立抗争について考察し、高麗武臣政権と寺院との対立を、寺院の経済的関係と政治的な関係から分析し、寺院が圧迫される原因とする。

また、「八関宝」と「済危宝」などの例に見られる「宝」は、それまでは経済的なものとして理解されてき、林在川 [1980] はそれが官庁で

² 洪潤植は、[1981]「仏画にみる韓国の信仰体系」などでも、同じ見解を保ちつつける。

あるとする。

4. 大蔵経と『義天録』

(1) 大蔵経の刊行

海印寺に所蔵されている高麗版大蔵経が日本の学界に紹介されたのは、1904年と1908年の関野貞の報告を嚆矢とする³。その後、小野 [1909] 「朝鮮伽耶山海印寺大蔵経板」が出された。これは、高麗大蔵経板に関して高宗の再刻を認め、大蔵経板がいくつか存在する可能性を提示するほか、義天との関連についても述べている。これに続く小野 [1910] は、海印寺と義天との関連を提示しながら高麗大蔵経の彫造が三回行われたとみる。

1910年には、当時の韓国政府の宮内府事務官であった村上龍佑が宮内府大臣関丙奭に海印寺の大蔵経を調査した結果を「海印寺大蔵経版調査報告書」として報告している⁴。

次いで浅見倫太郎「高麗版大蔵経彫造年時考」が出、主として刻経の年代が研究の対象となり二回彫造説が出された。妻木直良も二回説を主張する。妻木は浅見倫太郎とほぼ同時に大蔵経に関する意見を発表している。すなわち、上記の浅見倫太郎の論は『朝鮮』28-29 (1910,6・7) に、妻木は『新仏教』(1910,5・6) に掲載している。妻木は浅見の論を手に入れた後、『朝鮮』1910年9月号に浅見の論に対する感想を載せる。

妻木が浅見を批判することはあるが、妻木の論旨は、主として小野への反論であり、そこでは妻木は浅見に力を得ている。これらの論争は、主として刻経の年代および回数に関する議論である。

妻木直良は高麗時代の大蔵経彫板は二回であり、第一回は顕宗朝、第二

³ 関野貞[1904:192]『東京大学工科大学術報告』6「韓国建築調査報告」の中に、「海印寺修多羅蔵及法宝蔵」として、写真及び簡単な説明を付している。その後[1908]、この大蔵経板を高麗時代のものと判断する。

⁴ これは未見である。桜井義之 [1979]『朝鮮研究文献目録』(龍溪書舎)に内容の構成が示されており、そこに「大蔵経彫造年代考」という項目がある。

回は高宗朝であるという。ここでの大蔵経彫板とは論書を除外した經典だけの彫板を意味する。妻木は続けて、最初の高麗大蔵経は宋本を基礎とすることや契丹本が卓越したことを証明した。そして『校正別録』を作った守其を高く評価している。

一方、小野は [1909] , [1910] の中で三回説を主張する。これに反論して妻木の二回目の論が出た後、小野 [1911] は七つの論を出して再び三回説を主張する。この主張のポイントは、① 文宗の大蔵経彫刻の事実が義天の教章の蒐集の以前に終わったこと、② 従って、高麗の大蔵経の彫造は、顕宗・文宗・高宗の三回あると主張することである。しかし、妻木 [1911a] は小野の七つの説をそれぞれ論駁しながら論を終えている。

続いて菅野銀八 [1922] 「海印寺大蔵経板について」は、彫造年代などの問題に対しては、従来の幾つかの説を検討して、顕宗からはじまり、80余年に渡り断続して作られたとし、経板の転輸説に関する記事の矛盾も指摘する。これは高橋亨 [1914b] に対する批判でもあり、分司都監により、朝鮮時代の初期までは、二本の蔵板の可能性を認める見解である。要するに江華島板と分司都監による蔵板の存在を認めることである。版また経板の中、補板などの年時に関しては、『宗鏡録』が大蔵板と同じ時期のものであるとする海冥壯雄の説を受容し、他の目録の年時に関しては未定のままで残している⁵。しかし高橋亨 [1934] 「海印寺大蔵経板について」はその可能性を否定し、元来、江華島で制作された大蔵経が、いつ、どのような理由で海印寺に移されたかについて論じながら、結論として、時期は高麗時代後期の際に倭寇の侵攻に備えて、より安全な海印寺に移設したことを論じている。

⁵ 村上龍佑 [1910]「海印寺大蔵経版調査報告書」(未見)には、『宗鏡録』以下を追加とする。また、常盤[1913]は関野貞が撮影し持ち帰った『法苑珠林』の書体が従来のものとは異にしていることから追雕と見る(321号35頁および322号61頁)。後ほど詳しく論じるように、大屋徳城[1926]は『宗鏡録』が大蔵経とは関係ないことを論じている。

なお、高麗大蔵経は他の大蔵経との比較を通して明らかになっていく。

妻木直良 [1912] 「契丹に於ける大蔵経彫造の事実を論ず」は、高麗版大蔵経が善本である理由として守其の『校正別録』に注目し、それは学者に益になる作業と言いながら、第一回目の彫造は宋本によるもので契丹版大蔵経は見えていなかったと述べる⁶。

続いて常盤大定 [1913-1914] 「大蔵経彫印考」では、中国で開版された大蔵経との詳細なる比較を通して高麗版大蔵経の特色について論じている。この研究では蜀本が990年に高麗に将来されるなど他の蔵本に及ぼした影響を強調し、高麗本にもっとも有力な基礎本は丹本であると述べる。常盤は宋本から詳しく調査してから、高麗本の長所には以前の宋の官板・丹本・国本の三種類を基礎として、守其等がそれを校勘したことが他本に勝れる所以であると述べる⁷。

他の大蔵経との比較からの結果は、禿氏祐祥 [1935] の論文にまとめられた。禿氏は「大蔵経の宋本、契丹本並びに高麗本の系統の中で、高麗本の特色は、経本に誤脱の少ない事と唐末宋代に現存した経本を遺漏なく収めていることである」とする。また、守其の『校正別録』の重要性を強調しながら、高麗本は最初は宋本により、改刻は主として契丹本に依ったものという。なお、高麗本が基礎とした本が優秀なものであったことも述べている。

これらに引続き、池内宏の池内 [1923] 「高麗朝の大蔵経（上）」、池内 [1924a] 「高麗朝の大蔵経（下）」、池内 [1924c] 「高麗朝の大蔵経に関する一二の補正」は、高麗大蔵経の研究が開始されてから10余年の研究動向を整理しつつ自説を展開する。池内は経板を二本とみる菅野銀八 [1922] の説を否定し、海印寺の経板は雕蔵とは関係ないものと見る。ま

⁶ この問題は、近年、房山石経の研究が進んだことにより、詳細な事情が明らかになった。藤本幸夫 [1996] 「高麗大蔵経と契丹大蔵経について」を参照のこと。

⁷ 常盤大定は、1913年3月から1914年5月までの間、7回に分けてこの論文を『哲学雑誌』(313号・314号・316号・317号・321号・322号・324号)に発表する。この中、高麗大蔵経と直接関係があるのは321号と322号である。

た、分司都監は鄭晏が私財を投資したものとする⁸。

以後、これまでの研究を補助したり、拡大したりする様々な論文があらわれる。その代表的な研究者が1911年以来高麗大蔵経の研究に入った大屋徳城である。

大屋徳城 [1926] 「朝鮮海印寺経板攷一特に大蔵経補板並に蔵外雑板の仏教文献学的研究一」は、それまで注意されてこなかった海印寺の補板並に雑板に関する仏教文献学上の価値を論じた研究である。まず、補板に関して各々文献の性格を明らかにしながら、文献学的に価値のあるものとして智儼の『搜玄記』と新羅・高麗の文献を挙げる。同様に、雑板の中には五種の文献を価値のあるものとしている。

続いて大屋 [1939a] では、高麗顕宗朝に彫造された初雕本と高宗朝に彫造された再雕本（大屋はそれぞれ旧雕本、新雕本と呼ぶべきことを説いている）の具体的な違いを実証的に論じている⁹。

次に紹介するのは、藤田亮策 [1944] 「海印寺雑板攷」である。この研究は海印寺雑板に関する最大の調査報告であるが、その遺稿が近年発見され『朝鮮学報』の138号から140号に掲載された。この研究は大屋徳城の雑板研究を超え、その独自の構成は体元の願刊経などの私板を始め、高麗から朝鮮末期までの雑板とに分類しながら、実証的な研究を行っている。また、その直前に書かれたものが [1943] 「海印寺事跡に就て」である。これは藤田亮策の遺稿集 [1963] 『朝鮮学論考』に収録されており、中では海印寺の雑版の混乱や誤りを報告している。

さて、雑版を除く海印寺の大蔵経は、日帝時代に二度にわたり、朝鮮総督府を中心として印出された。一回目は1915年に朝鮮総督寺内正毅により、日本の京都湧泉寺に治めるために印出されたものであり、二回目は1937年に当時の満州国皇帝の要請を受け、日本政府が高橋亨に印出を委嘱したも

⁸ 分司都監に関するこの見解は、分司都監が崔怡だけに関連すると言った自説の補正であり、それはまた刻蔵そのものは崔怡の貢献というべきだとする菅野銀八 [1922] の説に対する補正でもある。

⁹ 具体的には、日本の南禅寺に現存する大唐西域記と大唐大慈恩寺三蔵法師伝と海印寺のものとを校勘して、初雕本を整理したのが再雕本であるという。

のである。前者の来歴については1916年4月発行『朝鮮叢報』中の「高麗大蔵経奉獻顛末」に、後者の来歴について高橋自身が高橋亨 [1951] 「高麗大蔵経板出顛末」にまとめている。また、京城帝国大学法文学部の定期的事業として朝鮮古書を出版影印する中でも印出されたこともあったという。

(2) 義天の『義天録』

① 『義天録』の研究

義天により彫造された教蔵についての研究は、高麗大蔵経との関連で少しづつ言及されている。中でも本格的に取り扱っているものは、池内宏 [1923] の論文である。池内宏は「第四 義天の統蔵」という節に章疏蒐集と統蔵刊行という二つの項目に分けて叙述する。次に大屋徳城 [1926] も「第五章 義天の統蔵改彫に関する疑義」で、教蔵の開彫の成否とその板自体の存在に関連する疑問点を述べている。それ以後 [1937b] 『高麗統蔵彫造攷一並に義天の思想及び編纂事業に関する研究一』で最もまとまった高麗教蔵に関する研究を行う。また、これを補遺する論文 [1938] も発表された。

義天の教蔵は、高麗の板本が次々発見されそれに対する研究も行われながら、その実態が判明されつつあった。その中で、池内宏は、池内 [1922]、池内 [1924b] では、それまで逸書であった唐代涅槃宗の法宝の著『大般涅槃経疏』が松広寺で発見されたことを報告し、それが義天の校勘したものであることから注目を集めた。池内宏はこれが朝鮮最古の板本と述べていたが、後に池内 [1924b] では、中には追雕されたものもあると訂正している¹⁰。

¹⁰ 藤田亮策 [1938] 「紙反古」(藤田亮策 [1963] 『朝鮮学論考』に収録)でも、従来高麗版と認められた様々な經典が、紙の状態から朝鮮時代の重印であることを主張したこと研究もある。日本へ残っている高麗本のほとんどが朝鮮時代の再印本ということについては、すでに常盤大定 [1913] で指摘されているが、藤田亮策のこの説は、当時の韓国での新発見の板本をめぐる議論への意見である。また、こうした説は大屋徳城

なお、河村道器 [1931b] は義天教蔵の演義鈔板の日本将来について論じながら、足利時代に日本に将来された蔵版の中で「註華嚴経」となっている記録に注目する。これによると義天開板の『演義鈔』は、宋土より開板されたものと、高麗の中で開板されたものとの二種類があり、「註華嚴経」は宋土より開板されたものとする。しかし、現在日本に残っている『演義鈔』は遼代の年号になっていることから、高麗で開板されたものということになる。これにより、朝鮮時代の「註華嚴経」と言う記録は、当時のものを宋土より開板されたものと決め付けたからであるとする¹¹。

② 義天を中心とした研究

義天は教蔵の刊行に尽力したことから、義天の研究と教蔵の研究とは並行して行われてきた。義天の行業や言行を伝える資料が比較的多く残っていることも義天に関する研究が盛んに行われてきた要因である。更に、義天は教蔵の刊行のために国王の反対を押しきってまでも入宋し、浄源などの宋の人物と交流を持つなど、当時の東アジアの中でも重要な人物であることが証明される。

妻木直良 [1911b] は、①入宋求法、② 統蔵刊行、③ 義学振興の三点に注目し、彼が高麗仏教を再興した人物であると述べ、高麗華嚴の中興者であるとともに高麗に於ける性相学の唯一の人であると評価する。高橋亨 [1929a] 『李朝仏教』では、義天が、宗密の教観兼修をもって華嚴を統一し、天台を用いて禪を包摂したという。この見解は高橋亨の以後の論文 ([1938] [1956]) にも踏襲される。

内藤雋輔の、内藤 [1924] 「高麗の大覚国師に関する研究(上)」、内藤 [1925] 「高麗の大覚国師に関する研究(下)」は、主として伝記の立場からの論述であるが、この研究では伝記を含め、義天の仏教史の中での

[1923] 「義天統蔵の日本伝来に就て」『朝鮮』100号記念増刊号の附設「松広寺蔵涅槃経疏に就て」の中で、指摘されている。

¹¹ 足利時代の朝鮮への大蔵経の請求に関しては、すでに渡鮮日僧の記録を取り扱った古谷清 [1911] の論がある。

位置を探り、最後に年譜を付している。内容は、『義天録』の分類形式に対する批判もあるが、義天が南山律を講義し流通させたことのほかに、浄土、法相、天台との関係を述べる¹²。

さて、義天について最も完備された研究には、大屋徳城 [1937b] 「高麗統蔵彫造攷—並に義天の思想及び編纂事業に関する研究—」を挙げなければならない¹³。これは約70年前の研究であるとはいえ、現在でもその価値は失われてはいない。本書の構成を示すと次のようになる。

- 第1章 序論
- 第2章 義天の入宋求法
- 第3章 義天歴訪の諸師
- 第4章 義天の教蔵蒐集
- 第5章 新編諸宗教蔵録の編成
- 第6章 統蔵の彫造
- 第7章 統蔵の伝播
- 第8章 義天の思想及び信仰
- 第9章 円宗文類の編纂
- 第10章 釈苑詞林の編纂
- 第11章 竜龜手鏡及び竜龜手鑑
- 第12章 結論

これは義天の生涯から事業にいたるまでのすべてを取り上げているが、た

¹² 内藤雋輔はこの研究の中で義天の文集の版本が一つではないことをすでに指摘している。これを継承して河村道器[1931]「大覚国師集の異版に就て」で版本に関する詳しい研究が行われた。

¹³ 大屋徳城 [1937]『影印高山寺本新編諸宗教蔵総録』は研究ではないが、そこでは『義天録』の長所と短所とを述べている。長所とは朝鮮・遼・宋の撰述を多く採録したこと、反面、短所は採録の順序の基準がなく、禪と日本の撰述を記録してないことであるとす。これについては、江田俊雄[1937]『青丘学叢』28の書評参照。

だ天台宗に関しては詳論していない¹⁴。

次に『円宗文類』の研究である。『円宗文類』は義天により編纂された華嚴学のアンソロジーともいべき著作である。これについての研究は、前述した大屋によりなされているが、その後も文献の発見などの報告がなされている。現在、刊行されている『円宗文類』は巻14と巻22の2巻だけであるが(正統蔵経巻103, 韓仏全4に収録)、巻1が日本の龍谷大学に所蔵されており、その翻刻と解題が吉津宜英・柴崎照和 [1998] により行われている。

『円宗文類』の編纂と宋代の天台僧、四明如吉の『天台文類』との関連は前出の大屋 [1937] 「第9章 円宗文類の編纂」で既に論じているところであるが、柴崎照和 [1996] も新たな視点から論じている。

さらに義天の法孫である廓心による『円宗文類』の注釈である『円宗文類集解』の巻中が日本の天理大学に残っており、吉津宜英・柴崎照和両により解題と翻刻がなされた(吉津宜英・柴崎照和 [1994])。これに続き、柴崎照和 [1995] は廓心の事跡を整理するとともに『円宗文類集解』成立の背景を論じ、吉津宜英 [1995] は『円宗文類集解』の学術的な特徴を論じ、①法蔵と澄観の一体化、②元暁への依拠、③円宗の強調、の3点に特徴を求めている。

5. 『三国遺事』と『海東高僧伝』

(1) 『三国遺事』

『三国遺事』の作者である一然に関する研究として初期に属すと考えられるのは今西竜の今西 [1919] である。これは一然の伝記資料に対して歴史的な視点から資料批判を行っている。さらに、その当時に問題となっていた一然をめぐる様々な問題を扱っている。それ以降は、一然に対する研

¹⁴ 江田俊雄は[1937]『支那仏教史学』1-3と『青丘学叢』28の書評で、大屋徳城の天台に対する扱い方を批判している。

究は、青柳編 [1924] 『朝鮮文化史大全』の中で一然の碑銘の内容を紹介する程度に止まる。

時代は下り、崔柄憲 [1987] は、『三国遺事』の叙述から一然の仏教の歴史観を探り、それを踏まえて韓国古代仏教に対する認識体系を理解する目的で書かれている。そこでは六つの問題を提示しているが、その中の一つ、仏教教学と宗派に対する認識の問題だけを簡単に紹介すると、一然は『三国遺事』を著述する時に、宗派意識から離れていたからこそ、新羅時代の様々な宗派の多様性を記録することが可能になったと述べている。また、一然が禅僧であるにもかかわらず『三国遺事』から禅宗関係を除外したのは、彼が禅仏教と伝統仏教を区分していたからであるという。

一然自身の仏教観を追及した論文にはいくつかあるが、朴相俊 [1995]、朴相俊 [1997] は、一然の碑銘と『三国遺事』所載の「讚」を中心に、禅僧一然の生死観を各々「教義・世間観・内照観」「真土観・隠遁観・当来観」から分析している。これによると、一然は自己発見をして塵界と当来世がともに真郷と理解し、本然の修行観を表しているという。

一方、張愛順 [1997] は『三国遺事』を中心として一然の仏教に対して論じ、一然の態度を元暁の総合仏教的立場とつながると見る。ただ、論者も認めているように論旨は弱い。

(2) 『海東高僧伝』

覚訓の『海東高僧伝』に関しては、古くは今西竜 [1918] 「海東高僧伝について」がある。ここでは『海東高僧伝』の発見の経緯からその重要性などを紹介している。以後、野村輝昌の解題があり、呉光熾 [1979] 「覚訓の寂年について」は、覚訓の生没年代に関して論じている。

また、『海東高僧伝』の僧名の索引として里道德雄 [1981b] 「『海東高僧伝』僧名索引稿 朝鮮仏教僧名集成 III」がある。さらに内容に関して、章輝玉訳 [1993] 「海東高僧伝」は書誌や文献を踏まえた上での研究で参考になる。

6. 天台宗と浄土及び図識信仰

本章ではこれまで述べた枠組から残したテーマを一括して扱う。この組み合わせに他意はない。

(1) 天台宗

① 韓国天台について

朝鮮の天台宗は、新羅時代に断片的な記述があるほかは宗派として成立した明確な記録は見がたい。だが、新羅末期に義通が呉越国に渡り、中国天台宗第十三祖となり、続いて諦観が呉越国からの天台典籍の求めに応じて中国に渡り、『天台四教儀』を著わす。続いて高麗義天が入宋し、帰国して天台宗を開宗することが朝鮮における天台宗の明確な設立時点と考えられるが、一方では義天は華嚴を旨としていたのであり、彼の中で華嚴と天台がどのような関連を持っていたかについては問題となる。

こうした朝鮮天台宗に関する議論は、鈴木覚心 [1934] 「朝鮮天台について」で最初に詳しく論じられる。ここでは、義天以後の天台が天台疏字宗と天台法事宗とに分かれていたことを述べる。この中、天台疏字宗は天台の章疏を研究する一派で、天台法事宗は法華懺法を主として実修する一派であるという。そして、天台法事宗は朝鮮初期の仏教であり、諦観から義天の時期までは天台疏字宗といえるとする。

時代が下り1970年代になると、金昌奭 [1978] 「韓国古代天台について」が出る。これは分かりやすい研究である。

② 諦観

なお、諦観に関する個別研究も行われている。特に諦観の『四教儀』に関する註釈は古来140種にのぼるほど数多い¹⁵。一卷となっている『四教儀』

¹⁵ 諦観に関する研究ではないが、古来、『天台四教儀』に関しては140種にのぼる様々な注釈書が現したという(苗村高綱 [1976])。日本で大正および昭和期に行われた研究

の巻数に対して、李永子 [1969] は二巻の可能性を提示する。この『四教儀』に対する本格的な研究は、池田魯参 [1976] の「諦観録『四教儀』序説」である。これは、『四教儀』が湛然の教学を踏まえながら、『八教大意』の教説内容と、その解説法に基づき、智顛の教判組織とその原理を整理した書物であるとし、天台の正統派として認めている。

③ 義天

続いて義天による天台宗創立については、まず吳光楸 [1977] が天台宗創立の意図として、地方の豪族と関係の深い禅宗を吸収する政治的目的を挙げている。これに対して金昌奐 [1980] は、政治の關係のほかに学問的な問題として教観一致思想によることを述べている。続いて金昌奐 [1981a] は、高麗天台宗隆盛の動向を探るものとして懺法に着目し詳しく解析している。

さて、義天と天台宗との関わりについて、常に問題となるのは義天が天台を主としたのか、華嚴を主としたのかということである。これについて高橋亨 [1938] 「大覚国師義天と高麗仏教」は、義天以前の天台宗に関して述べながら、新羅末の禅師である順之の教判の中で、天台宗が円教として、頓教の禅と頓円教の華嚴の次の位を持つことから、天台宗が開立するにはいかなかったとする。次に高麗に入ると、諦観などのことから天台宗開立の素地の熟するものがあって義天が出世したとする。この論では義天が宗密の教観兼修ともって華嚴を統一し、次は天台として禅を包摂したことに関して詳しく述べる。また、義天の天台宗開立は華嚴の業績よりも輝くことと見る。結論として「彼の宗門は華嚴にもあらず天台にもあらず、実に華嚴の圭峰天台の智者の教義の骨髓たる教観並修宗旨其物である。更に言を進むれば、彼に取りては教宗と禅宗の区別さへも実は無用であって、

には以下のものがある。

稲葉円成 [1922] 『天台四教儀新訳』法蔵館、1922(1953年復刊)

稲葉円成 [1935] 『天台四教儀講義』仏教聖典講義刊行会、1935。

関口真大 [1935] 『昭和校訂天台四教儀』山喜房仏書林、1935(1993年復刊)

彼の理想としては高麗仏教の全宗旨をば此の教観並修の新宗旨に摂取融会して以て三百年未了の教界の角立諍論を根絶し其くて自ら統一せる高麗教界の法王たらんと志した者」と理解する¹⁶。

この教観並修は義天の仏教学を捉える際のキーワードとなるものである。崔柄憲 [1986] 「大覚国師義天の天台宗創立と仏教界の改編」は、義天の天台宗創立と仏教界の改編をテーマに、天台は単純に禅・教の統合のため新しく立てた宗派ではなく、元暁を強調して華嚴と法相の兼通を主張し、また華嚴の禅に対しては天台宗を以て教観並修を主張するなど様々な重複された原因から成立した。それには政治的な意図もあり、仏教界の改編をもたらしたと述べる。

最近、鄭世成 [1999] 「高麗大覚国師義天の研究」では、義天は法華一乗を重視したとしながら、彼の思想を前期・後期に分け、各々「華嚴天台同一説」「法華一乗の顕説」とする。しかし、この論文は崔柄憲 [1986] などを見てないと思われ、また、議論自体も単純すぎるきらいは否めない。

④ 天台了世

天台宗に関しては信仰の面からも研究が行われる。

まず、知訥と一緒に修禅結社に参加し、白蓮結社を主導した天台了世については、禅の方面から忽滑谷快天 [1930] では彼の参禅について述べている。それによれば、了世は天台の三昧儀によって法華三昧を以て往生浄土を求めたとする。また、金昌奐 [1981b] は、了世は義天が王権との関係を以て天台宗を中心に禅宗を摂取したことに対して、純粹な宗教的立場で懺法と念仏をしながら禅と対立したのは、義天の場合と違うとすると評価する。また、これまでの研究とは異なり仏教美術の面から論じたのが内藤浩之 [1995] である。これは万徳山白蓮結社と阿弥陀信仰について論じたものであり、美術品などの調査から了世の白蓮結社は阿弥陀浄土往

この中、関口真大 [1935] では、『天台四教儀』に関する注釈を挙げている。

¹⁶ 1960年に『朝鮮学報』10号に載せた論文「大覚国師義天の高麗仏教に対する経緯に就いて」の見解もほぼ同じ内容である。

生を目的としていたと解釈する。

⑤ 了円

次に高麗中期に活躍した了円の研究を取り上げる。彼の『法華靈驗伝』についての研究は早く稲葉馨吉 [1929]、[1932]で行っている。ここでは、了円の生没年について、それまでは不明であったが、跋文などの記録から推測している。また、思想の関連性や日本との関係を述べている。時代が下ると、呉光楸 [1974]「高麗了円撰『法華靈驗伝』があり、そこでは了円が禅浄双修の流れにあることを述べている。また、『法華靈驗伝』の成立時期の研究には、金昌爽 [1981b]「了円の生存年代について『法華靈驗伝』の成立時期をめぐって」がある。

(2) 浄土思想及び図讖信仰

① 浄土思想

最近になって韓泰植 [1997]が義天の浄土観は慈愍流の禅浄双修の念仏禅と、慧遠流の念仏結社であると述べているが、高麗時代の浄土思想については、主として知訥の浄土思想が研究の対象となっている。

忽滑谷快天 [1930]は、知訥の禅と念仏は一致するという。江田俊雄 [1957]も同じ主旨で、知訥が念仏を受容するが、それは心統の方法としての受容であることを述べる。源弘之 [1970]は知訥の『念仏要門』について、知訥の念仏観は定慧双修により漸修の法門を明らかにしたものと認める。恵谷隆戒 [1976]は高麗時代の浄土思想の特徴として義天や知訥を取り上げながら、それが宋代の浄土思想に影響されたため禅浄和合の性格を持つという。韓京洙 [1990]は、知訥が唯心浄土や法性浄土などを禅の立場から包括したと評価している。

ここまでは知訥の浄土思想は禅と念仏の和合の側面からみているが、これとはまったく違う意見もある。金敬熙 [1997]は『定慧結社文』を中心として知訥の禅と浄土信仰の関係を追究して、知訥において浄土信仰は禅とは区切られて理解されたことを示す。

また、高麗時代の弥勒信仰の状況を論じたものとして、金三竜 [1985]

は、新羅に続いて高麗時代にも独特な弥勒信仰が展開することを、①旧百濟地域の弥勒信仰という項で、開泰寺、灌燭寺を中心に述べる。また②高麗弥勒信仰展開の諸傾向では、弥勒信仰が末法思想と結合し、下体埋没仏の現象に現れることや、民間信仰化していくことを確認した。このような弥勒信仰の民間化傾向は、次の朝鮮時代に受け継がれるとする。

② 図讖信仰

高麗時代の仏教の大きな特徴は、道説に象徴される図讖信仰の流行である。これは仏教と固有信仰(民間宗教)の接合とも言える。この方面の研究は、早くには李丙濤 [1932]「高麗初期の図讖及び神秘思想」1-3(『朝鮮』207-210)がある。現代では梁銀容の一連の研究がある。

梁銀容 [1980]は『高麗史』の中から、道説と高麗王室との関わりを精査し、道説讖記が高麗時代に一貫して重視され続けていたことを明らかにする。続いて梁銀容 [1982a] [1982b]は図讖信仰の受容の問題について、高麗末演福寺塔の重建をめぐる儒仏間の論争について研究し、図讖信仰に基づく演福寺塔の重建が儒教側からの反発を将来し、朝鮮での仏教抑圧のきっかけとなったこと、また一方では朝鮮に入っても演福寺塔の重建は続けられたことから、図讖信仰は一貫して信仰を集めていたことを論ずる。

これと関連して仏教と道教との関係については、高橋亨 [1929b]で少し触れているのが始めであると思われる。それ以後、江田俊雄 [1958]は、高橋亨の説を受容し仏教と道教化を論じたことがあるが、それに関する詳しい研究は、梁銀容 [1984] [1985]「高麗時代の道教と仏教(上)(下)」がある。この研究で梁銀容は、道教と仏教の結びは、王室と術僧に限っているとし、道教の習慣が仏教の中に入り込むほど直接な関係ではないとする。

7. 結語

以上、高麗仏教の研究状況を整理した。研究史全体から見ると、日本で

の高麗仏教に関する研究は高麗大蔵経への関心に発端があることがわかる。大蔵経に関する研究は、年代論や彫蔵の回数から議論が行われ、徐々に高麗大蔵経に関する知識が深まる。

大蔵経に対する興味は、やがて大蔵経と関係の深い義天に移り、義天の教蔵印行や彼の目録集に注目が集まるようになる。そして、これに関する研究は、当時の東アジアの文化交流まで追究することにより、高麗と契丹、高麗と宋、高麗と日本との国際関係まで触れる。このような研究は、ほとんどが戦前に行われており、当時の日本の学風を反映している。また、大蔵経に対する関心は、日本に実在する高麗板大蔵経が残って行ったからこそ活発に行われたと思われる。このようなわけで高麗大蔵経に関する研究が、初期に量的に多い。

最後に、高麗仏教の研究視点としては、儒教との関連に対する研究はほとんど存在しないことから、今後、この方面の研究が望まれる。

〈略号及び参考文献〉

略号

『駒仏紀要』	『駒沢大学仏教学部研究紀要』
『駒大院年報』	『駒大学大学院仏教学研究會年報』
『印仏研』	『印度学仏教学研究』
『仏大仏文研所報』	『仏大大学仏教文化研究所所報』

参考文献

◆日本人筆者

- 青柳南冥 [1911] 『朝鮮宗教史』(駸々堂)
- 青柳南冥編 [1924] 『朝鮮文化史大全』(名著出版)
- 浅見倫太郎 [1910] 高麗版大蔵経彫造年時考／『朝鮮』28-29
- 池内宏 [1922] 新たに発見せられた涅槃経の疏／『東洋学報』12-4
- [1923] 高麗朝の大蔵経(上)／『東洋学報』13-3
- [1924a] 高麗朝の大蔵経(下)／『東洋学報』14-1
- [1924b] 再び朝鮮松広寺本大般涅槃経疏について／『東洋学報』14-2
- [1924c] 高麗朝の大蔵経に関する一二の補正／『東洋学報』14-4
- 池田魯参 [1976] 諦観録『四教儀』序説—成立意義と問題点—／『駒仏紀要』34
- 稲葉馨吉 [1929] 「法華靈驗伝」について／『史学雑誌』40-8
- [1932] 法華靈驗伝解題／『朝鮮』202
- 稲葉円成 [1922] 『天台四教儀新訳』(法蔵館) * 1953年復刊
- [1935] 『天台四教儀講義』仏教聖典講義刊行會
- 今西竜 [1918] 海東高僧伝について／『史林』3-3
- [1919] 高麗普覚国尊一然に就て／『芸文』9年7・8号
- * 『高麗史研究』[1944] (近沢書店) に再録
- 江田俊雄 [1937a] 大屋徳城著「高麗統蔵経造放」を読みて／『青丘学叢』28
- [1937b] 大屋徳城著「高麗統蔵経造放」を読みて
- ／『支那仏教史学』1-3

- [1958] 朝鮮の仏教／『講座仏教IV』（大蔵出版）
- 大屋徳城 [1923] 義天統蔵の日本伝来に就て／『朝鮮』100号記念増刊号
- [1926] 朝鮮海印寺経板攷一特に大蔵経補板並に蔵外雑板の仏教文献学的研究一／『東洋学報』15-3
- [1937a] 『影印高山寺本新編諸宗教蔵総録』（便利堂）
- [1937b] 『高麗統蔵雕造攷一並に義天の思想及び編纂事業に関する研究一』（便利堂）
- [1938] 『高麗統蔵雕造攷補遺』（便利堂）
*大屋徳城著作撰集9（国書刊行会）に収録
- [1939a] 高麗蔵の旧雕本と新雕本の交渉に関する実証的研究一特に大唐西域記と大唐大慈恩寺三蔵法師伝について一／『支那仏教史学』3-1
- [1939b] 寧楽仏教と高麗朝の仏教／『宗教研究』1-4
*『仏教史の諸問題』大屋徳城著作撰集6 [1985]（国書刊行会）
- 大類純 [1971] 朝鮮仏教考察序説／『東洋学研究』5（東洋大学）
- 小野玄妙 [1909] 朝鮮伽耶山海印寺大蔵経板／『宗教界』5-12
- [1910] 韓国海印寺の大蔵経に就て／『宗教界』6-12
- [1911] 高麗祐世僧統義天の大蔵経板彫造の事蹟／『東洋哲学』18
- 鎌田茂雄 [1987] 『朝鮮仏教史』（東京大学出版会）
- 神尾式春 [1937] 『契丹仏教文化史考』（満洲文化協会）
*複製 [1982]（第一書房）
- 河村道器 [1931a] 大覚国師集の異版に就て／『青丘学叢』4
- [1931b] 義天蔵演義鈔板の日本将来に就て／『青丘学叢』6
- 菅野銀八 [1922] 海印寺大蔵経板について／『史林』7-3
- 恵谷隆戒 [1976] 韓国浄土教の特性／『印仏研』48(24-2)
- 里道德雄 [1981a] 朝鮮仏教における八関齋会／『宗教研究』246
- [1981b] 『海東高僧伝』僧名索引稿 朝鮮仏教僧名集成 III／『東洋学研究』（東洋大）15
- [1983] 高麗仏教における八関会の構造／『東洋学研究』（東洋大）

- 竺沙雅章 [1982] 高麗寺のことなど一宋・麗交渉史の一齣一／『韓国文化』4-8
- [1988] 宋代における東アジア仏教の交流／東アジアにおける仏教（シンポジウム）／『仏教史学研究』31-1
- 柴崎照和 [1995] 廓心「円宗文類集解」巻中の研究一廓心と「円宗文類集解」成立の背景について／『印仏研』86(43-2)
- [1996] 明恵と新羅・高麗仏教／『印仏研』89(45-1)
- 鈴木覚心 [1934] 朝鮮天台について／『山家学報』新9
- 関野貞 [1904] 『東京大学工科大学学術報告』6「韓国建築調査報告」
- [1908] 海印寺大蔵経板に就て／『宗教界』3-6
- 関口真大 [1935] 『昭和校訂天台四教儀』（1993年復刊，山喜房仏書林）
- 高橋亨 [1914a] 朝鮮仏教宗派通減史論／『東亜之光』9-10, 11
- [1914b] 海印寺大蔵経板について／『哲学雑誌』327
- [1924] 高麗の才人僧窓菴／『東洋』8
- [1929a] 『李朝仏教』（宝文館）
- [1929b] 朝鮮仏教に就いて／『朝鮮仏教』66-67
- [1938] 大覚国師義天と高麗仏教／『朝鮮』276
- [1951] 高麗大蔵経板出類末／『朝鮮学報』2
- [1956] 大覚国師義天の高麗仏教に対する経論に就て／『朝鮮学報』10
- 朝鮮総督府 [1916] 高麗大蔵経奉献類末／『朝鮮彙報』大正5年
- 妻木直良 [1910a] 高麗大蔵経彫板年代に就て／『新仏教』11-5
- [1910b] 再び高麗大蔵経に就て／『新仏教』11-6
- [1911a] 三たび高麗大蔵経彫造を論図ず／『新仏教』12-4
- [1911b] 高麗の大覚国師／『仏教史学』2, 4, 6号
- [1912] 契丹に於ける大蔵経彫造の事実を論ず／『東洋学報』2-3
- 常盤大定 [1913.3-1914.5] 大蔵経彫印考／『哲学雑誌』（313・314・316・317・321・322・324）
- 禿氏祐祥 [1935] 大蔵経の宋本・契丹本並びに高麗本の系統／『仏教学の諸問題』（岩波書店）

- 内藤篤輔 [1924] 高麗の大覚国師に関する研究(上)／『支那学』9
 [1925] 高麗の大覚国師に関する研究(下)／『支那学』10
- 内藤浩之 [1995] 万徳山白蓮結社と阿弥陀信仰をめぐって—高麗時代後期
 仏教美術の信仰的背景—／『哲学』98(慶応義塾大学三田哲学
 会)
- 苗村高綱 [1976] 『天台四教儀』の末疏／『宗学院論輯』25
- 二宮啓任 [1956] 高麗の八關会について／『朝鮮学報』9
 [1958] 高麗朝の上元燃灯会について／『朝鮮学報』12
 [1959] 朝鮮における仁王会の開設について／『朝鮮学報』14
 [1961] 高麗朝の齋会について／『朝鮮学報』21, 22
 [1969] 高麗時代の仏教／『歴史教育』17-8
- 忽滑谷快天 [1930] 『朝鮮禪教史』(春秋社)
- 旗田魏 [1932] 高麗朝における寺院経済／『史学雑誌』43-5
- 源弘之 [1970] 高麗時代における浄土教の研究—知訥の「念仏要門」
 について—／『仏大仏文研年報』9
- 藤田亮策 [1938] 紙反古／(遺稿集 [1963] 『朝鮮学論考』に収録)
 [1943] 海印寺事跡に就て／(遺稿集 [1963] 『朝鮮学論考』に収録)
 [1944] 海印寺雑板攷／『朝鮮学報』138-140 [1990-1991]
- 藤本幸夫 [1996] 高麗大藏経と契丹大藏経について／『中国仏教石経の
 研究—房山雲居寺石経を中心に—』(京都大学学術出版会)
- 古谷清 [1911] 足利時代渡鮮日僧の目的について／『朝鮮』36
- 三品彰英 [1954] 朝鮮における仏教と民族信仰／『仏教史学』4-1
- 村上龍信 [1910] 『海印寺大藏経版調査報告書』
- 湯山明 [1985] 演福寺銅鐘の梵語銘文覚書—この小論を末松保和教授に
 捧ぐ—／『東洋学報』66-1,2,3,4(東洋文庫)
- 吉田剛 [1999] 晋水浄源と宋代華嚴／『花園大学禅学研究』77
- 吉川文太郎 [1921] 『朝鮮の宗教』(京城・羽田茂一)
- 吉津宜英 [1995] 廓心「円宗文類集解」巻中の研究—「円宗文類集解」
 巻中の教学の特色について／『印仏研』86(43-2)
- 吉津宜英・柴崎照和 [1994] 廓心「円宗文類集解」巻中について／『駒仏紀要』

[1998] 義天編纂『円宗文類』巻第一—解題と翻刻／『駒仏紀要』56

◆韓国人筆者

- 金敬熙 [1997] 知訥の禪と浄土信仰—『定慧結社文』を中心として—／『印
 仏研』91(46-1)
- 金三竜 [1985] 『韓国弥勒信仰の研究』(教育出版センター)
- 金鐘国 [1980] 高麗武臣政権と僧徒の対立抗争に関する一考察／『朝鮮学
 報』21・22
- 金炳奎 [1941] 朝鮮仏教に於ける宗派の沿革／『東洋大学論纂』1
- 金昌爽 [1978] 韓国古代天台について—高麗天台宗成立以前を中心として
 —／『駒大院年報』12
 [1980] 高麗天台宗成立の歴史的考察／『駒大院年報』14
 [1981] 高麗天台宗に於ける懺法について／『印仏研』58(29-2)
 [1981] 了円の生存年代について—『法華靈驗伝』の成立時期をめぐ
 って—／『印仏研』59(30-1)
- 朴相俊 [1995] 韓国普覚国師の死生観—普覚の碑銘を中心として—／『印仏研』
 87(44-1)
 [1997] 韓国普覚国師の死生観—とくに『三国遺事』所載の「讚」を
 中心に—／『印仏研』89(45-1)
- 梁銀容 [1979] 高麗八關会現象(其一)／『印仏研』55(28-1)
 [1980] 『高麗史』所引の道選識記について／『印仏研』53(27-1)
 [1982a] 高麗仏教の図識信仰受容について／『印仏研』60(30-2)
 [1982b] 高麗末演福寺塔の重建をめぐる儒仏間の論争について
 ／『印仏研』61(31-1)
 [1984] 高麗時代の道教と仏教(上)／『仏大仏文研所報』1
 [1985] 高麗時代の道教と仏教(下)／『仏大仏文研所報』2
- 吳光燦 [1974] 高麗了円撰「法華靈驗伝」について／『印仏研』44(22-2)
 [1977] 高麗天台宗開立の背景について／『印仏研』52(26-2)
 [1979] 覚訓の寂年について／『印仏研』55(28-1)

- 李丙濤 [1932] 高麗初期の図識及び神秘思想1~3 / 『朝鮮』 207~210.
 李永子 [1969] 天台四教儀に関する問題 / 『印仏研』 35(18-1)
 林在川 [1980] 韓国仏教における「宝」について / 『印仏研』 57(29-1)
 章輝玉訳 [1993] 「海東高僧伝」 / 『現代語訳一切経; 1』 / 大東出版社
 章輝玉 [1997] 東アジア仏教の相互交流—10・11世紀の韓・中仏教の交流
 関係— / 高崎・木村編『東アジア社会と仏教文化』 (春秋社)
 張愛順 [1997] 普覚国尊一然の仏教観—『三国遺事』を中心として—
 / 『印仏研』 89(45-1)
 全宗釈 [1987] 高麗仏教と元代喇嘛教との関係—喇嘛教の影響を中心に— /
 『印仏研』 70(35-2)
 鄭世成 [1999] 高麗大覚国師義天の研究 / 『仏教学論集』 23(立正大)
 崔柄憲 [1986] 大覚国師義天の天台宗創立と仏教界の改編 / 『朝鮮学報』 118
 [1987] 三国遺事に見える韓国古代仏教史の認識—仏教教学と宗派に
 対する認識問題を中心に— / 『アジア公論』 16-4
 韓京洙 [1990] 普照知訥禪師の浄土観 / 『印仏研』 77(39-1)
 韓基斗 [1981] 韓国仏教の五教両宗問題 / 『朝鮮学報』 98
 韓泰植 [1983] 延寿門下の高麗修学僧について / 『印仏研』 63(32-1)
 [1997] 高麗・義天の浄土観について / 『印仏研』 91(46-1)
 洪潤植 [1976] 『韓国仏教儀礼の研究』 / 隆文館
 [1981] 「仏画にみる韓国の信仰体系」 / 『韓国文化』 3-4

サトウ アツシ (東洋大学非常勤講師・博士(文学))
 キム チョンハク (東京大学博士課程・哲博)

朝鮮時代の仏教に対する研究

金 天鶴

1. はじめに
2. 通史
3. 仏教政策と仏教儀礼
4. 仏書刊行
5. 人物研究
6. まとめ

1. はじめに

日本における朝鮮時代の仏教に対する研究は、三国時代や高麗時代の仏教の研究に比べるとそれほど数多くない。それについて様々な理由が考えられるが、一つには、韓国(朝鮮)仏教史の中で朝鮮時代の仏教を衰頹の仏教と見ていたことが挙げられるであろう。要するに、教学の伝統が積み重ねられてきた日本の観点から見た場合に、朝鮮時代の仏教は韓国仏教の中でも後れる仏教になる¹⁾。

しかしながら、朝鮮時代の仏教に対する研究は早くから興味を持たれることになる。今西龍は1911年の「朝鮮仏教関係書籍解題」の中で韓国仏教研究のための書物に関する紹介と解題、またほぼ同時期である1911年から1912年の間に古谷清「朝鮮李朝仏教史梗概」から開始される。以降、日本

¹⁾ この論の中で、韓国仏教は韓半島全體の仏教を指すことにし、朝鮮時代を指すときは、「朝鮮時代仏教」とすることにする。